

わたしの聖戦

◎◎女性が働くことについて◎◎ 57

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津江

死者からのメール

いつからか、パソコン中心にメールをやり取りしていたのが、少しずつ携帯によるメールが増えてきた。何となく、パソコンメールは仕事の仲間、携帯メールは家族やごく親しい人とのメール：、といった自分なりの区別もほとんどなくなってしまう。それだけ携帯のメールが使いやすく、また気楽に使えるというところかもしれない。もちろん機能もアップしたのだろう。

この半年の間に近い人がふたり亡くなった。ひとりとは、大学院のときの教授であり、54歳、原因はすい臓がん。もう

ひとりはラジオのパーソナリティである40歳の女性で乳がんであった。いずれも若く、またどちらも最近日本で増えているがんによるものだった。

たまたま、ふたりとも私のこれまでの拙い経験を頼ってくれたのか、病気がわかって以後にもお会いし、話を聞いたりメールでやり取りをしていた。藁にもすがるような思いで、「何でもいいから情報を集めたい」、「今よりいい治療があるのではないか」、「もっと長く生きるためにはどうしたらいいか」という、人間なら誰もが思うこと、そして死が思いがけず近

くに迫ったときには切実に考えるであろうそれらの重いところの叫びを、私は直に突きつけられてしまった。

病院で働いていると、死は日常茶飯事である。他人の死は自分にとって

特異な施設から一步出れば、死というのは全く違うものになる。それは自分を含めた狭い世界での最も重要な、そして避けられない悲劇として迫ってくる。

くだんのふたりの死は、まさに職場で

ある病院の外

で、自分の生活の中で起こった「ひとごとではない死」であったのだ。

そして今、携帯のメールボックスを開くと、ふたりのメールが残っている。すでにこの世に

はほとんどないも同然となる。しかし、それでも今メールとしてここに彼らの生きた証が残っているという実感。この小さな手のひらサイズのマシンの中に死んだ人の「何か」があるというのは考えてみたら不思議な思いがするのである。

自分が死ぬときには、ベッドの上で片っ端から、あるいは極く限られた人々へ気持ち綴った携帯メールを飛ばすのだろうか。そしていよいよというときには「さよなら」と打って息絶えることもあるのだろうか。

私の携帯には死者からのメールが厳かに「生きて」いる。すでにこの世にいない人の息遣いを包み込みながら、尚普段どおりに使われる携帯という近代機器。これもまた時代の流れとして受け止めていくしかないのだろう。

はあくまで仕事の一部として存在しているに過ぎず、日々のローテーションの中で巡ってくるイベントでもある。残酷なようにだがそう思わなければ医療の仕事に就くことなどできはしない。ところ、病院という



イラスト・三浦義雄